

「初発の神諭」を読む(1)：第一節まで

著者名(日)	窪田 高明
雑誌名	神田外語大学日本研究所紀要
巻	5
ページ	12-29
発行年	2013-06
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00000792/

「初発の神論」を読む（1）——第一節まで

窪田 高明

概要

この文章は、「初発の神論」と呼ばれている文章を読み、大本教の思想、それもとくに出口なおの思想の在り方を理解しようとするものである。「初発の神論」は、大本教の教典である大本神論という一連の文章のうち、最初に記述されたものとされており、重要な意味を担ってきた。今回は、「初発の神論」の基本的な事項の説明をし、さらに第一節までを読解する。第二節以降の読解は、次稿に続く。なお、最後に読解を踏まえて、全体の整理を附す予定である。

序

初発の神論とはなにか

「初発の神論」を含む大本神論とは、どのような文章なのか。昨今では、大本教とか大本神論という言葉自体が、あまり一般に知られたものではなくなっている。そこでまず、基礎的な事柄を簡単に説明しておくことにする。

大本教は開祖の出口なおが、明治二十五年に「神懸かり」して始まった宗教である。彼女が神懸かりして以降、彼女の霊力を信じる少数の人々が作った小さな集団として出発した。なおは京都府の綾部に暮らしており、そこで教団は始まったのだが、綾部はやがて教団の聖地となる。明治三十二年、後に教団を指導していくことになる上田喜三郎、後の出口王仁三郎が参加する。後に述べるように、なおと王仁三郎は、教

団の二つの中心を構成するようになり、たがいに必要な存在であると考えつつも、信仰の在り方、組織内の主導権をめぐって対立を抱え込んでいた。その対立を内包しつつ、教団は成長し、なおが高齢になると、実質的な中心は王仁三郎になっていく。大正中期になり、知識人や軍人が参加するようになると、大規模で活発な教団に発展した。大正七年、出口なおは死去する。そのころ、大本教団からは、この世の終末、世界の改革、いわゆる大正維新といった情報が社会に向けてさかんに発信され、政府は大本教団に対する警戒心を高めた。

政府は大正十年になると、大本教を危険な集団であると判断し、全面的な弾圧を行なった。大本教は弾圧に耐え、裁判で無実を主張した。大正十五年の大正天皇の死にともなう大赦によって裁判は終わる。王仁三郎は新しい聖典として『靈界物語』を口述筆記で作成し、あらたな教団を再建する。しかし、その活動が活発になると、昭和十年に再度の弾圧を受け、綾部と亀岡の教団施設は全面的に破壊された。ところが、裁判の途中で違法な取り調べが指摘され、王仁三郎、妻で二代教祖のすみは出獄することになる。この間、多くの信者が拷問で死んだり、負傷したりした。娘婿の出口日出麻呂は精神に異常をきたした。第二次世界大戦が終わると、教団はまた新たな活動を始めるが、王仁三郎は昭和二十三年に死去、さらにすみは昭和二十七年に死去する。その後は、二人の娘

の直日なほひが三代教祖となる。ただし、直日は父の思想と行動には違和感を感じていたと思われ、そのために、その後、大本教は従来とは異なる傾向を帯びていった。さらにその後、大本は三つのグループに分裂したが、二つの聖地を継承して、最大の信者数を持つのは「大本」という名称の宗教法人である。

大本教は、二回の弾圧で社会の注目を浴びたが、大本を経験した人の中から別に団体や教団の創始者となる人が多く出現したことも知られている。よく知られているものに生長の家、世界救世教があり、さらにはそこからさらに独立した団体がある。また、第一次弾圧前の大本の中心人物の一人であった浅野和三郎は、心霊科学研究会を創始し、スピリチュアリズムと呼ばれる神秘的な霊への関心を持ち続けた。

このように大本教はきわめてさまざまな内容を抱えており、その全体像を考えることは容易ではない。ことに、出口王仁三郎という人物はその行動、著作のいづれにおいても、容易に分析することのできない存在である。

冒頭に書いたように、本稿では、まずは「初発の神論」という文章をとおして、出口なおの思想の基本的な内容と、その目指したものが何であったのかを考察したい。

「初発の神諭」第一節本文

「初発の神諭」は、次のように始まっている。

明治二十五年旧正月……日

三千世界一度に開く梅の花、^{うしろめ}良の^{こんじん}金神の世になりたぞよ。梅で開いて松で治める、神国の世になりたぞよ。

日本は神道、神がかまわな、行けぬ国であるぞよ。外国は獸類^{けもの}の世、強いものがちの、悪魔ばかりの国であるぞよ。日本も獸^{けもの}ばかりの世になりておるぞよ。外国人にはかされて、尻の毛まで抜かれておりても、まだ眼が覚めん暗がりの世になりておるぞよ。これでは、国は立ちては行かんから、神が表に現われて、三千世界の立替かえ立直しを致すぞよ。用意をなされよ。この世は全然^{さっぱり}、新つの世に替えてしまふぞよ。三千世界の太洗濯^{おおせんたく}、大掃除を致して、天下泰平に世を治めて、万古^{ばんこ}未代^{みだい}続く神国の世に致すぞよ。神の申した事は、一分一厘たがわんぞよ。毛筋の横巾^{ばんこ}ほど間違^{まちが}いはないぞよ。これがたがうたら、神はこの世におられんぞよ。

日付の問題

「明治二十五年旧正月……」と冒頭にあるのは、この文章が書かれた日付である。ただし、この日付は歴史的な事実と

しては正確なものではない。大本教団が発行した『大本七十年史』においても、なおが「筆先」を書きはじめたのは明治二十六年の秋以降のことであると記述している（上巻九〇頁）。では、明治二十五年旧正月とはどのような時点なのか。それは、出口なおがはじめて神懸かりしたとされる日であり、大本教にとって起点となる出来事の起きた日なのである。

明治二十五年が明けたが、京都府の綾部の町で五十七歳の出口なおは追い詰められていた。夫は長く患った後、五年前に死んでいた。長女よねは決まった相手がいいたのだが、明治八年にやくざ者に略奪されて、その男と生活していた。明治十四年には二女ことが、家を出ていった。ことは自分の家族には冷たかったといわれる。長男は夫の死ぬ前年、自殺未遂の後、家を出て行方がわからなくなった。さらになおの元には五人の子供がいたが、次々と外に出て、りょうとすみという二人の娘が残っていた。りょうは明治十三年に生まれ、末子のすみは明治十五年、なおが四十七歳のときに生まれてくる。なおの夫・政五郎は木工であったが、金銭感覚に欠けた上に、遊び好きで、一家は明治十七年には破産している。なおは収入を得るために、不要になったものを買い集めて、業者に売る商売をしていた。それはきわめて効率の悪い商売であったが、それしか彼女が収入を得る方法がなかった。

明治二十三年には三女のひさが突然、神懸かりした。ひさ

の夫は彼女を金光教の布教師に見せ、その神懸かりに対処しようとした。これがきっかけでなおは金光教を知ることになったと思われる。翌年には長女のおねが発狂した。おねの場合はその病状は重く、おねの夫は彼女を室内に閉じ込めることになった。ようするに、なおとその家族の生活はどうにもならない状況だった。

明治二十五年の年が明けて間もない日（旧正月五日、新暦の二月三日節分で、大本教開教の日とされている）、突然、なおは普段とはまったく異なる強い調子で、長女おねの家にいき、改心するよう告げよ、と幼い二人の娘に命じた。幼い二人の娘は、異常な様子の母の言葉に従うしかなかった。娘たちが帰ってくると、なおは水を浴びる行をしていたが、それが終わると、普段の様子に戻って子供に言葉をかけたという。

これ以降、なおは、たびたび異常な状態になった。彼女に神が降りてきて、彼女の肉体を使って、言葉を語るのである。神は夜でも大きな声で言葉を発し続けた。なおは、はじめからみずからの異常な状態が神懸かりであると確信していたのではない。出口すみは後に『幼ながたり』という回顧録（インターネットサイト「うろ」 <http://urolsblog.jp>）に掲載された電子ファイル版による。この底本は一九五五年四月刊の天声社版）を書いており、なおと神の会話が次のように書かれている。

しかし一方、教祖さまは内心ご心配でありました。自分の子が二人までも、世にいう狂人（きやうじん）になり、いま又、自分がこのような夢ともつかぬ気持ちに犯されては、この先どうなるであろうか、と悩まれ——これはこうして居れぬ——と、ご自分の身構えを正して、体にかかってくるものを振り払おうとし、更に思わず、自分の言葉をもって、神様の正体を問ひ正そうとされました。

「おん身は何者でありますよな、事細やかに名告（なを）て下（くだ）されよ」（中略）どこからともなく、非常に美妙（うつく）しい音声（こえ）で教祖の耳に響いてきました。

「われは良の金神であるぞよ、元の国常立（くにこたて）之命、今より汝（からだ）の身体を守るぞよ」

これは思わず、教祖の口から洩れた言葉であります、これを自分で聞かれて、なお不安に耐えかね、さらに畳みかけるように——良の金神——と申される神さまに、ご自分の肉体からお退（ひ）きとり願いたいと申されました。

（二十一、霊夢）

ここで述べられていることが、この時点でなおが口にしたことをそのままに正確に伝えているとは信じがたい。この文章は後年の回想録であって、すみの記憶が変化している可能

性が高い。すみ自身が、この前の箇所、次のように書いているからである。

ご開祖の^{かみづかり}婦神は、明治二十五年旧正月の十日ということになっております。しかし私には、教祖のご^{かみづかり}婦神の月日についてハッキリした記憶はありません。

何しろ私は、そのころ、三日一年の九つでありますから、人のところの中におこったことが分かったり、こまかいことにまで^{ゆきまじ}行届いて見分けられるはずがありません。その当時のくわしいことは憶えておりません。

(二十、ご開祖の婦神)

開教の日とされる、旧正月五日も、客観的な事実として主張されているのではなく、一種の神話的な日付として定められていることが読み取れる。なおが神懸かりしたときの様子、それを近くで見た子供の衝撃は読み取ることができるが、その時点においては、なお自身も、すみを含めた周囲にとって、なおの神懸かりの意義がはっきりしないものだったことを読み取れる。

神懸かりという現象

神懸かりという現象を現代のわれわれはあまり身近に見る

ことがない。恐山で知られるイタコの口寄せなども広くいえば神懸かりと類似した現象であるが、多くの人にとっては身近に感じられるものではないだろう。しかし、出口なおが神懸かりした時代の綾部の人々にとって、神懸かりや憑霊は今ほど奇異なものではなかった。「当時の民衆にとって、憑霊現象そのものは珍しいできごとではなかった」(安丸良夫『出口なお』、朝日新聞社)。安丸が佐藤信淵の『巡察記』(『綾部市史 資料編』所収)などを引いて記述しているように、なおの住んでいた地域は自然環境にも恵まれず、経済変動の影響を受けてきわめて貧しかった。しかし、そうした経済的な事情だけではなく、この地域には神懸かりのような現象も珍しくはなかったようである。神懸かりといっても高級な神や霊だけではなく、多くは狐憑きなどのような低級とされる霊に憑かれることもよくあったようである。憑きもの一般で言えば、地域を限定することなく、日本の各地、また世界の多くの地域で見られる現象であり、それ自体は特異なものではない。現代になっても、ときどき、こうした現象によって引き起こされた事件が報道されることがある。

神懸かりから筆先へ

なおが神懸かりし、周囲を困惑させているころ、綾部で放火と思われる火事が続発した。警察はなおに嫌疑をかけ、彼

女を拘束する。警察でもなおは神懸かりになって、警官を叱ったりしている。その後、なおは釈放されるが、その際、室内に閉じ込めておくことが条件とされた。だが、室内でも大声で神の言葉を語り続けることは家族に迷惑であったし、世間体も悪かった。なお自身がみずからの神懸かりに当惑していた。したがって、なおは神に対して、このような発動を止めるように願った。その結果、神はみずからの言葉を、文字に書くことを求めることになる。なおは、紙と筆を受け取って、自宅の座敷牢の中で神の言葉を文字に書くようになる。これが「筆先」である。

なおの直筆の筆先は、現在もかなりの数が残されていると思われるが、いまだに公表されていない。ただ、そのわずかに公表されたもの、たとえば『大本七十年史 上巻』冒頭に掲げられた明治二十六年十一月二十九日という日付の書かれたものをみると、原文は仮名、および数字を仮名代わりに用いて、書き表わされている。それは、普通の文章を読み書きできる人の書いたものとは異なる表現になっている。平凡社東洋文庫版の『大本神論 天の巻』の冒頭の写真版の下にも、原文をそのまま翻字したものが掲載されている。その表記は次のようなものである。「をで九ちなをはち十いさいたいそ五ねん／を九にとこたちのみ／ことへんじよなんしの／みたまがをで九ちの／をかみとあらわれ／て……」(これが

大本神論として公刊されたものでは、以下のような表記になっている。「大出口直 八十一歳 大正五年／大國常立尊、変性男子のみたまが、大出口の大神と顕われて……」。活字に置き換えられていても、読解は容易ではないことがわかるだろう。筆先の原文は文体だけでなく、字体も独特であり、意味を取ることがなかなか難しい。なおが普通の文章を読み書きできなかったということを知れば、このような表現になってしまったことが容易に納得できる。

ここで触れておかなければいけないことは、出口なおが、文章どころか、文字の読み書きもできなかったといわれていることである。文字の読み書きができない人が神の言葉を書き記すということは、普通であれば考えにくいことである。もちろん、このような不可能なことを行なえてしまうことが神の力なのだといってしまえば、理解はそこでとまってしまふ。神の力という説明を認めれば、すべてがそれで解決してしまう。なおが字が読めないために苦労していたということには、なおを知る人の証言がある。しかし、それは彼女がまったく字を知らないということと同義ではない。彼女は社会の中で生きてきたのであり、長らく屑物の売り買いを行っていた。規模は小さくとも商売をしていたのであり、そのときに数字ややさしい文字は知っていたと考えるのが自然であろう。しかし、記号、単語程度の字は読めたにしても、文章と

してそれを読み書きする能力はなかったということではないだろうか。筆先の原文も、文字としては書けているが、文章は話し言葉のままで、多くの方言や訛りがそのまま書き記されている。このような筆記能力では、書き言葉としての文章を書くことは困難であつたろう。文章を見た場合も、仮名や数字は個別には理解できたであろうが、文章を文章としては読めなかったであろう。

筆先から神論へ

第一次の弾圧まで、この筆先が大本教にとって最も重要であり、神聖な文章であつた。はじめは信者に直接与えられたこともあり、神の意志の表現として重んじられた。しかし、王仁三郎が教団での權威を確立するようになると、筆先の管理は王仁三郎の手に委ねられた。他の信者に直接渡されることもあつたが、なお自身が書いたものは外部に発表されることはなかった。出口王仁三郎が、後に筆先の表記を改めて発表したものが大本神論である。

筆先という行為が始まったのが明治二十六年秋であつたとすると、「初発の神論」の明治二十五年旧正月という日付は事実ではあり得ない。なおに神がついており、おかげ（靈験）があると受け止める人々が出てくるのも、この時期である。こういう人々は、なおの神を「綾部の金神」と呼んでいた

『大本七十年史 上巻』。当時の筆先では宗教的な内容はまだきちんと整理されてはならず、おかげを求める宗教的な要求を満たすだけの単純なものであつたと思われる。

したがって、「初発の神論」の文章は、内容から考えても、あきらかに当時書かれたものとは思えない。では、この文章は、公表された大正六年にいたるいづれかの時点で、なお、ないしは王仁三郎の手で創作されたものだろうか。すべて王仁三郎の創作だと考えることは難しいだろう。大正六年の時点では、出口なおはまだ存命だったからである。また、昔からの信者も存在しており、彼らは早くから、筆先を目にしたリ、その内容を説明されていた。大本教の内部には、王仁三郎の言うこと、することに對して批判的な人々も多かった。第一次弾圧のころ、なおの宗教を絶対視する人々や、娘のひさに従う人々、有力な信者であつた浅野和二郎を中心とする人々など、王仁三郎と一体ではない集団があつた（復刻『神の国』解説、武田崇元）。とすれば、王仁三郎がみずからの考えで筆先の内容を恣意的に改変すれば、それに対する批判が行なわれたはずである。したがって、「初発の神論」の文章については、初期になおの語つていた言葉や筆先をもとに、王仁三郎が整理して、大本教の教義の基本的な内容を集約的に表現したものと考えるべきだろう。

安丸良夫は次のように述べている。「初発の神論」は、の

ちに王仁三郎が筆先のなかやなおの日頃の言葉から適当な表現をあつめて構成したものである。したがって、王仁三郎の思想が影を落していると思われるところや、筆先としては整いすぎた表現になっているという印象がある。しかし、それだけにより整序されたかたちで、なおの教義の概略を伝えるものである(『出口なお』八五〜八六頁)。

『大本史料集成 思想篇』に収められた「明治二十九年の御筆先(月日不明の分——村上房之助写本)」や「明治三十年二月九日」とされている文章などは、もとの筆先の形態をとどめているように思われ、「初発の神論」がそのような原資料を「構成」したものであるという説明は納得できるものである。また、王仁三郎がみずからの筆先、神論として発表した明治三十年代に書いたとされる「裏の神論」という一連の文章があるが、その最初の文章は次のようなものである。

「○斯世の暗黒を照らさん為に、天津御祖の神は、天の八重雲を伊都の千別きに搔別けて、嚴の御魂瑞の御魂を豊葦原の瑞穂の中津神国に天降し玉へり」、「○二つの御魂は天津御空より、黄金の光輝を放ちて肉の宮に鎮まり玉ひて奇しき神業を示して、神の国の証明を為し、此の曇りたる世を開き給ふ」(以上、『伊都能売神論』八幡書店、二〇〇二年、一八六頁。振り仮名は現代仮名遣いに変更)。これは、あきらかに語りの文体ではなく、文章語の文体である。また、なおの死後、

王仁三郎がなおとみずからの霊を統合したとする立場から、「伊都能売神論」と称する一連の神論を書いている。「此の大本は何事に由らず神界の命令通りに致さねば、途中で経綸がかわりたら今度の事は成就いたさんぞよ。今度世の立直しが出来致さなんたら、世界はモ一ツ乱れて潰れるより仕様はないぞよ。此世界を立直す尊い経綸の判る所は、綾部の龍宮館、地の高天原より外には無いから、我も私も申して是から金銀持つて、御用に使ふて下されてと申して来るもの斗であれども、神の赦しなき人民の宝は受取る事は成らぬぞよ」。文体は、なおの神論の表現に近いところがある。しかし、その文章をよく読むと、文章の書ける人がなおの文体を模して書いたものであることがわかり、なおの神論の文章とは基本的に種類が異なる。したがって、なおの筆先そのものは、基本的には、なお自身の手になるものと考えてよいであろう。

大本教においては、なおの表現が、神の言葉として絶対視されていたが、表記や字体までを変更してはいけないとは考えられていなかった。王仁三郎が表記を変更できたのは、彼がなおと並ぶ宗教的な資格を持っていると考えられていたためだと考えられる。しかし、このような発表の経緯は、大本神論を読む場合に、なおの段階の思想を読み取ることに一定の作業を必要とすることになる。王仁三郎の選択、表現は、

なおの意図とのあいだに齟齬があるのではないかという不安がつきまとうのである。「初発の神論」を読むとき、純粹なおの思想をそこから引き出すことは意外と難しい。王仁三郎の思想と重なる部分を除去して、残ったものをなおの思想とできるわけではない。王仁三郎は、なおが神懸かりし、筆先を書くようになった後に教団に参加したわけだが、その時点では、二人の信仰はともに明確な形をもっていたとは考えられず、その後に相互に刺激しながら発展したものであって、二人の信仰の変化の軌跡を参照しながら理解を進めるしかないのである。

底本、表記の問題

ここで、本稿における大本神論の表記について説明しておく。

なおが筆先を書くようになると、その一部はなおの周辺に生まれつつあった小規模な信者に与えられた。だが、それは前記のように非常に読みにくいものであった。その後、出口王仁三郎（当時はまだ上田喜三郎だった）が教団に加わるようになると、その管理は彼に一任されるようになる。やがて、大正九年になると、それは大本教の機関誌『神霊界』誌上に大正六年二月号以下に発表されるようになる。筆先は、神論と呼ばれるようになる。筆先と神論は内容としては同じ

ものだが、なおの原文を筆先と呼び、漢字交じり文で表記したものを神論と呼ぶ（ただし、この使い分けは厳密なものではないようだが）。王仁三郎が作成した漢字交じり文の原稿は、弾圧の過程で失われ、活字化されたものしか残っていない。

王仁三郎が採用した表記は、現在の目から見れば、読みやすくするというだけではなく、意味理解に一定の方向を与えるものであった。「いきがみ」を「活神」、「われよし」を「利己主義」、「体主霊従」、「しぐみ」を「仕組み」「経綸」と表記したりするのである。また、段落分けにも手を加えたりしている。しかも、雑誌『神霊界』に発表されたものと、『大本神論 天の巻』『大本神論 火の巻』としてまとめられたものでは、表記や段落分けが違っている部分がある。

『神霊界』誌上に掲載された神論は、表記を改め、選択されて『大本神論 天の巻』として発刊された。ついで『大本神論 火の巻』が用意されたが、発刊直前に第一次大本事件が起きたため発行禁止になった。『神霊界』誌上に発表されたものとはまとめられたものでは、表記や段落に変化がある。「初発の神論」では、『神霊界』版が段落が多く、各段落の上に◎が付されているため、短文の集積という印象がある。『大本神論 天の巻』では、表記だけでなく、◎を取り除き、段落を減らしたため、まとまった文章という印象を与える。

『神霊界』では、次段落の冒頭に「東京で仕組みを駿河美濃尾張大和玉芝国々に、神の柱を配り岡山」という、意味の取りにくい文章が存在するが、『大本神論 天の巻』ではこれを取り除かれている。この二冊の『大本神論 天の巻』には、なおが死んだ大正七年の十二月号の後にとくに発行された「大本教祖号」までに発表されたほとんどの神論が収録されている（なお、この「大本教祖号」には岩田鳴救の名による「教祖の偉蹟」という文章が掲載されているが、この文章には初期の信徒である四方平蔵の証言などにより、なおの開教前後の経緯がまとめられている）。

大本神論にはこれ以外にもいくつかの版が存在する。大正十二、三年に教団が史料を整理して『大本年表』という手稿本を作ったときに、多くの未利用の筆先が採録された。しかし、これは刊行されていない。『霊界物語』は、第一次弾圧以降に、王仁三郎が新しい教典として発表したもので、その第六十巻には「天の巻」第一輯が収録されているが、文章にはかなり手が加えられている。戦後になって、教団は国からの圧力がなくなっただけで、多くの神論を信者に提供した。これが五巻本の『大本神論』である。ただし、この本は教団側の編集の手が加わっており、その史料としての性格を疑問とする意見もある（安丸）。

現在の大本の教団は、七冊に編集したものを『おおもとし

んゆ』として発行している。『神霊界』に掲載されたもののほぼすべてを掲載順に並べ、七冊に分けて刊行しており、これは現在も人手できる。第一巻の「あとがき」によると、国際の問題になりうる部分を変更したとある。また「外国」という語に注記して、排外主義であると受け取られることを避けようとしていると思われるので、そういう箇所の表現を一部変更したようである（ただし、『神霊界』の最後に掲載されたものは収録されていない）。漢字は現行の字体に改め、かなは振り仮名を含め、すべて現行の仮名遣いに統一している。また、「かなの清濁はただした」とある。しかし、「初発の神論」が細かく四十もの段落に分けられていることなどからわかるように、原本から改変された部分があり、『神霊界』版の表現をそのまま印刷したものではない。このような改変作業の方針については言及されていないので、その意図は不明とするしかない。文字表記の方針や印刷の形態を考えると、おそらくは読みやすい版を提供しようと考えたのではないかと推測される。ただ、神論の内容、他の版との形態の差を考えると、もしその意図が読みやすくなることにあったとすれば、その意図は必ずしも目的を達しているとは思えない。多少、視覚的にはとりつきやすい印象を与えるが、厚みのある紙の使用、布の装丁、包装用の箱など、読むために親切な造本になっていない。また、注もなく、その意味でも読みやす

い本とはいえない。

一方、村上重良が戦前の『大本神論 天の巻』『大本神論 火の巻』に注・解説を付けて刊行したものが、平凡社東洋文庫版で、現在も入手できる。この版においては、漢字を「通行」の漢字に改め、重複するルビを省くなどしている。このような手入れは必ずしも統一されていない部分もあるにしても、基本的には原本を尊重しているようである。

『大本史料集成 思想篇』は、池田昭が原本以外の上記の資料すべてを参考にして、ほぼすべての筆先・神論を年代順に編集したもので、現時点でもっとも資料として原本に近いと思われる（松本、安丸）。しかし、大本教の多くの関係者にとってはここに示されている神論は馴染みのないもので、それが大本教の信仰を直接指導してきたものではないという点にも留意する必要がある。

また、池田は、年代別に六つの章を立て、神論を区切っている。池田は「読者の便宜をはかるため、章にわけた」とだけ書いており、この章立てがいかなる基準によるものであるかは説明していない。

結局のところ、どのテキストを採用するかは、当然ながらテキストを利用する目的によって違ってくる。本稿では、『神霊界』（の複製本）を底本として、他の版を参照した。王仁三郎は理解を特定の方角へ導く特徴的な表記を用いている

が、そのような表記を避けて、通常の日本語として読みやすくように適宜、現在通用している仮名、漢字混じりの表記を用いることにした。また、方言や特殊な表現の場合、表現をおすことはしなかった。ただ、このような表記の加工は、論者が本稿の記述のために選択したもので、それがテキスト表記として正当であると主張するものではない。

「初発の神論」第一節 読解

「良の金神」

最初の一文は、大本教の開教の宣言のような意味合いを持つ言葉である。「良の金神」が大本教の神であることが示されている。金神は陰陽道の神であり、ひろく民間でも崇りをなす悪神として信じられていた。金神の方角を侵すと、金神七殺という恐ろしい祟りが生じると思われていた。金神はその位置を移動するので、暦によってその位置を知り、それを避けて行為するようにしなければならないと考えられていた。『陰陽道叢書 近世篇』所収の論文に、丹波における土御門系の陰陽道の行者の活動を研究したものがあがるが、それから考えれば、綾部にも陰陽師の影響が大きかったと考えることができる。金神の存在は日常的に親しいものであった。そのような背景があった上に、決定的な影響を与えたのが、金光

教だったと思われる。

前述したように、なおの金光教との出会いは、娘のひさの神懸かりをきっかけとしている。ひさは明治二十三年九月に神懸かりし、手を焼いた周囲は、これに対処するため、金光教の教師を呼んで、神懸かりを治めようとした。ちょうどこのころ、青木松之助という人物によって金光教の布教が始まり、ひさの神懸かりをきっかけに、その宗教的な力を見たなおが信仰するようになったのが、始まりらしい（『綾部市史上』二六二頁）。

では、金光教とはどのような宗教なのか。金光教は、赤沢文治が安政六年に備中国浅口郡大谷村（現岡山県金光市）で開教した宗教である。当時はかなりの隆盛であった。金光教の神は天地金乃神、すなわ金神であった。農民であった赤沢文治は兄の神懸かりが契機となって、みずから金神の言葉を受けるようになる。金神は一般には祟り神であり、避けるべき方位の神であるとされるが、金光教ではこういう理解を否定し、金神を人々の人生を見守り、幸せな生活を送らせようとする神であると捉える。祟り神であるという理解は、人間の側の狭量から生じた誤った姿なのである。金神は祟りだけではなく、人間の生活のすべてを見守り、助ける神なのである。では、金神のそうした性格はなぜ人々に理解されなかったのか。ここに金光教の神の理解の特徴があるのだが、偉大

な神であるにもかかわらず、金神は人の側の力がなければ、その人々を守る力を発揮できないのである。金光教ではそのことを「あいよかけよ」という言葉で呼ぶ。神と人は相互に補完することで、その力を実現できると考えられている。それによって、人々は「おかけ」、すなわち神からの利益を得ることができるのである。金光教は本来、儀式も教義もほとんどないに等しい宗教である。明治十五年に、金光教は教団として自立できないかと考えるようになり、初期の中心的人物であった佐藤範雄が、広島にいた沼名前神社宮司の吉岡徳明に相談をしている。そのとき、吉岡が「信条はあるか」と質問したのに対し、佐藤の答えは「信条とはなんでありますか」というものであった。吉岡は「信条とは教義を簡条書きにしたものである」と説明したという。この会話からもわかるとおり、金光教はそもそも教義をもとうとはしなかったのである。「本教の自身をことばであらわすことは、まことにむずかしいところがある」（『概説金光教』二六八頁）。金光教は教義や信条でみずからを規定しているのではない。神と「あいよかけよ」の関係にある人間が、仲介者である「取次ぎ」をとおして、神に問いかけ、神の言葉を受け取り、それを自分なりに理解し、神を思いつつ生活していくことしかない。金光教の教典である『金光大神御理解集』に集められた信者の証言によれば、神の言葉は短く、しかもわずかな行

為への示唆でしかないように見える。神は偉大であるとともに微力な存在のように思える。神の言葉を受けたからといって、希望がすべてかなうというものではない。金光教はいわば、きわめて小さい宗教なのである。

このような信仰を、なおが受けていることができたのは、ひさの神懸かりを押さえるのに効果があったことが直接の原因であつたろう。しかし、同時に地域の陰陽道の活動、大工の子、妻であつたことによる金神という名前の神への親近感があつたと思われる。とくに、教義もなければ、神にも既成の権威がない金光教の場合、利益が前にすることはやむをえない。しかも、金光教は、本来、農民の宗教であり、自然への信頼感を基盤に持っているが、都市部で他のさまざまな信仰と競争することになれば、利益をもたらす力のみが強調されることになる。

大本教はみずからの信仰集団を「大本」と呼ぶ。ものごと、世界の「おおもと」、すなわち世界の根源という意味である。大本教のその後を知った上で、漢字の「大本」という表記を見ると、なにかそれが意味ありげな印象さえもってしまふが、本来は「おおもと」という、きわめて口語的な表現にすぎない。「天理」「金光」「妙霊」などという宗教の名称から比べれば、そもそもは身近な言葉遣いである。しかも、大本教ではなく単に「大本」「おおもと」といわれることが普

通である。この言葉が用いられた理由は、おそらく金光教からの影響だと思われる。金光教の教典の一つ『金光大神御理解集』は、金光教教徒の信仰経験を集めた文献である。その最初の「青井サキの伝え」は明治八年から信者となつた青井サキの信仰経験であるが、その中で金光教の本部の社を「おもとやしう大本社」と呼んでいる。金光教徒はみずからの中心の宗教施設を大本社と呼んでいることから、なおの信仰集団においても、みずからの中心を「大本」と自然に呼んでいたものと思われる。ここにも、なおの信仰が体験を神話的に語ることを中心として形成され、教理的な体系化の方向をもつていなかったことがうかがわれる。王仁三郎の影響力が強くなると、大本教はさまざまな宗教的な観念や思想的な影響を受ける。さらには浅野和三郎など知識人の信者が増えると、神学的、教理的な体系への欲求が強くなる。しかし、なお自身の宗教はそのような抽象的な方向ではなく、あくまでも神話としてみずからの信仰を語ろうとする。したがって、その展開は教理への発展ではなく、神話の成長として実現していく。

根源神としての金神

だが、なおが内部に抱えていた問いかけは、単なる利益への要求では終わらないものをもっていたのであろう。彼女の不幸は、多少の「おかげ」によって解決されるものではなかつ

た。生まれてから現在に至るすべての人生の過程が積極的な意味を持つものとして説明されなければ、彼女は神を認めることができない。なおは、良の金神とはいかなる神なのかを全面的に考えねばならなかった。なおは、金光教では善神天地金乃神とされた金神を、再び崇り神の良の金神として捉え、崇る力を回復させる。なおの金神理解は、それを世界全体との関わりを問うことになる。良の金神が世界を建て替える神であるという考えは、なおの信仰の始まりである。しかし、その神が、なぜ悪神として、世界から否定されているのかは、初めから明らかであつたわけではない。明治三十三年旧十二月十三日(『大本神論 火の巻』三四頁)で「此方が余り我が強過ぎたのであるから」、悪神の目論見で良に押し込められたと説明されている。また、明治三十五年旧三月十一日(『大本神論 天の巻』第二輯、九九頁)の神論では、「此方が厳敷く神々に申して頑張りたのであるが、大勢と独りとは到底敵(叶)はいで、万の神から良へ閉鎖(おしこめ)られたのでありたぞよ」と説明されている(『大本史料集成』所収のものを見ると、明治三十一年七月ごろの筆先にはこのような説明がすでになされている)。良の金神となる神は、そもそも世界の中心であるべき神であつたが、あまりにも厳格であり、「我が強い」性格で、自己主張が強かつたからで、多くの神々に反感をいだかれ、「元の大神様」に多くの神がこの神を押さ

えるように主張し、そのためこの神は、良に押し込められたという経緯が説かれる(この「元の大神様」という觀念は、天理教の教典にあり、その影響を受けていると思われる)。その後、この神が押し込められたため、諸神が自己中心的な態度に走り、この世が乱れてきた。そこで、いよいよ良の金神が本来の立場を回復することになるといふのである。なお、良の金神よりも上位の神として登場する「元の大神様」とはどういう神なのか、当然、問題となる。だが、初期においては、この神は良の金神を押し込めるための存在としてしか意味を持たず、あくまでも中心をなす神は良の金神であつた。良の金神が押し込められた原因は、彼の悪にあるのではなく、あまりにも厳格であつた点にある。この厳格さは欠点ではあるが、それがすべて否定的に評価されているわけではない。こうした厳格さは、なおの性格にも共通している。

「三千世界一度に開く梅の花」

「三千世界一度に開く梅の花、良の金神の世に成りたぞよ」という冒頭の言葉は、大本教の教えを代表する言葉として使われてきた。「三千世界」というのは、仏語で、全宇宙を意味するが、仏教者だけではなく一般に親しまれた語である。「三千大世界」ともいふ。『日本国語大辞典』第二版を見ると、説経節の『愛護の若』、その他、俳諧や浄瑠璃の用例が引か

れており、良寛の歌にも使われている。つまり、なおが知っていた言葉として不自然なものではない。最初に身の周りではなく、宇宙全体の変革を示す言葉を示すことは、このことが大本教にとってもっとも重要なものであったことを示していると解してよいだろう。大正期の大本教にとって「大正維新」と呼ばれる改革が重視された問題であったが、それはなおにとっても、早い段階から意識されていたものである。

さらに、そこで開く花が梅の花であることも重要である。梅の花それだけを取り出すと華やかな印象を与えるかもしれない。しかし、ここで梅の花が選ばれているのは、それが冬の寒さの中で咲く花だからである。しかも、梅は開くが、その後には治めるのは花のない松である。梅や松は、桜に対立するものとして想定されている。なおの中では、桜の花は華やかなだけで実がないものの象徴なのである。王仁三郎は、華やかもの、美しいものを好む人であり、庭に花の咲く植物を植えていたが、なおはそれを取り除かせていたという。花ではなく、野菜のなる植物を植えるべきだというのがなおの主張だった。なおは生涯にわたって、食事や衣類も粗末なもので暮らしていたが、感覚的な満足を求めることそのものを否定した。また、晩年に至るまで水行を持続したが、これも禁欲主義、厳格主義のあらわれである。

だが、なおはみずからの禁欲主義を唯一の正しい在り方と

していたわけではないようである。たしかに彼女自身の信仰の在り方としてはそれしかないと考えていたのだろう。金光教とは異なり、大本教は膨大な文章を発表しているが、それにもかかわらず大本教が信者に求めているものはあまり明確ではない。なおの筆先だけでもかなりの量ではあるが、その中で神を信じること、利己主義的な言動を否定することくらいしか、一貫して求められていることはない。なおは水行を毎日行っていたが、王仁三郎はそれを行なう気はなかった。それでもよかったのである。禁欲主義的な形を取ることは信仰の一つの在り方ではあっても、他の信仰の在り方を排除するわけではないのである。

このように寛容に多様な信仰の在り方を認める態度は、王仁三郎の思想ではよく指摘されるが、なおの側にもそのような傾向は認めることができる。

これは、大本教の思想のみならず、教団の組織、運動全般に見ることのできる性格である。なおと王仁三郎は、一つの円の二つの中心として、互いに反発し合いながら、一つの全体を形成しており、当然、反発と見える言動にも、その全体を守るという方向は維持されているのである。また、その二つの中心の動きにつれて、円の外周も動いていく。そこに、大本教自体を規定することの難しさが起因する。また、なおが死去した後、こうした構造そのものは、思想としては維

持されていたと思われる。

神国・外国

日本が神の国であり、外国とは異なるという認識は、大本教に固有のものではない。⁽⁴⁾ 古代においても、唐や天竺に対して、みずからの文化を認識することは行なわれてきた。中世になると元の襲来などの刺激で、神国意識が生じた。江戸時代には垂加神道、水戸学、国学などが自文化の優越を意識した言説を創りだした。幕末から明治になると、天皇を中心におく国家観が形成され、それにもない国家神道が生み出される。近代の神国観は、アジアにおける優越を生み出すが、それよりも重要な問題は西欧の文化の移入に対する反発という側面をもっていたことである。大本の外国認識は、基本的には資本主義の進展、従来の共同体の解体といった開国以降の社会変動を背景にしている。外国といってもどこか特定の国を意識しているわけではなく、まさに外国として一括するような認識をしていると思われる。七巻本の『おおもとしんゆ』の編集が、「外国」を具体的な国ではなく、利己主義的な精神を指すと説明したが、それは国際的な友好を正しいものと前提し、それにあわせて神論を理解しようとする姿勢のあらわれではあるが、なおの記述に即して理解するならば、それが「外国」であることも確かなのである。なおが意識し

ているのは、一方では唐であろうが、もう一方では西欧である。とくに日清戦争が終わるとロシアがまず意識される。

なおの神国観で見落としてならないのは、日本が神国であるのは過去に確立された事実ではないことである。「神国の世になりたぞよ」「神国に致すぞよ」とあるように、それは今、実現すべき目標である。というのも、現在の社会やその規範は、良の金神が押し込まれて以来、利己主義的な神の支配下で形成されてきたものであり、「立替え」「立直す」ことを必要とするものである。過去、現在の日本はそのまま神国として肯定されるわけではない。ここに大本教の神国観の特異性がある。一般的な神国観においては、日本の伝統、歴史を肯定するものとして日本が神国であると主張する。したがって、表層的な悪を排除すれば日本の伝統や文化は肯定される。本居宣長であれ、柳田國男であれ、そうした構図は共通する。しかし、なおにおいては、肯定すべきものは過去にも、現在にも実現したことがない。したがって、社会や文化は否定されるし、それらを背後から支える予定調和的な自然も存在しないのである。復古すべき原点は存在していないので、現在は未来に向かってすべて創りださなければならないのである。そこに大本教の考える理想の困難がある。近代化に反対するとともに、伝統的な日本的なるものも否定される。しかし、いかなる社会が理想なのかは明確ではない。わずか

に利己主義が明確に批判されるが、欲望にかわる行為の規範が明確に提示されるわけではない。徹底的な否定と曖昧な目標が、大本教の運動を迷走に導く一つの原因なのである。

「立替え」

大本教の核心をなす思想である。この世界は、厳格な神である金神が、他の神々の反乱で良に押し込まれて以来、「われよし」の世になっている。それをいったん破壊して立替ることが信仰の基本である。大本教は、社会と文化を基本的に否定して再建することを求めるので、その信仰は内面的な回心を目指すとともに、社会そのものを変革しようとすることを目標としている。その結果、大本教は政治権力との対決を将来するものであり、そこに多くの人に訴えるものをもっていたといえる。

ところで、このような「立替え」「立直し」という語は、建物についていわれる語である。このような語が宗教の根本的な目標を示すために使われるようになったのは、なおの生家や夫の職業が大工であったことに起因している。同時に、なおが影響を受けたと思われる天理教でも建築、大工に関連する言葉が使われている。「地場」は天理教の聖地、世界の中心を示す語であるが、神諭の中でもたびたび使われている。立替えという表現が初期は多く使われていたが、立直しと

いう言葉も使われるようになり、それが並列される用例が多い。後に大本教の教理を神学的に理解しようとする人々の中で、この二つの語を世界の再建の二つの段階と分けて考えることも行なわれたが、なおの文章ではそのような使い分けは行なわれていない。なおの神諭は、王仁三郎による神道や他の宗教の知識が付け加えられることもあり、初期においては目立たなかったり、見えなかった要素が徐々に表面化する場合があるが、それが神学的な教理として形成されるのではなく、神話として展開していったと考えられる。

「神の申した事は、一分一厘たがはんぞよ」

神の言葉は絶対のものであるとするこの主張は、なおにおいては「厳^{いす}の御魂」といわれるような厳格主義的な傾向にそったものである。しかし、その表現はかならずしも一つの意味で理解されるものではなく、さまざまな理解が可能であった。また、その表現を暗示的なものと受けとめて、それに解釈を加えることを可能にするものであった。さらに、なお自身はそれをある特定の文脈で理解していたとしても、それが別の解釈をされることもあり得たのである。そのようなさまざまな文脈で理解する方法は、王仁三郎が言霊学（言葉を音に分解して、その意味を解釈する方法）などを導入することで、大幅に拡大する可能性をもっていた。神の言葉は絶対である

が、その理解にはいくつかの可能性が開けていたのである。後に問題になる「大正維新」の時期についての主張の対立、すなわち立替え、立直しの時期をめぐる議論も、こうした表現と解釈の在り方から生まれてくるものであった。

(以下、次号に続く)

註

- (1) この神懸かりという現象は、広い意味ではシャーマニズムの一形態とされるが、日本の神懸かりにおいては専門とする宗教者だけに限定されるわけではない。また、神懸かりの場合、当人の人格がすべて消滅して、神に占有されてしまうものではない。精神医学的な言葉で言えば、本人の人格が崩壊するわけではなく、二重人格や統合失調とはやや異なる。『ロマンティックな狂気は存在するか』(春日武彦、大和書房、一九九三年)の「憑依現象」の項でも、憑きものつきの現象が取り上げられているが、神懸かり、とくになおの神懸かりが精神医学などの学問において合理的に説明できているわけではない。(2) 読み書きのできない人が、神懸かりになって、文字や文章を書くという現象は、扶鸞^{ふうらん}という中華文化圏で行なわれる信仰においても見られるという。『中国のこっ

くりさん——扶鸞信仰と華人社会』(大修館書店)で志賀市子は、扶鸞を行なう「扎手^{はりて}」の一人の次のような言葉を引用している。「学歴? 全く字を知らなくても大丈夫。学歴が低くて、学を知らない、読み書きのできない扎手もいるそうよ」(三三頁)。扶鸞の場合、扎手は、神懸かりになって書いた文字をみずから口にして、それを記録係が書き留めるので、文字が正確に書ける必要がないのかもしれない。なお、後に大本教が友好関係を持つようになる中国の道教系の団体である紅卍字会^{こうまんじかい}も扶鸞を行なう団体であり、教義の共通性だけでなく、こうした点も、親近感を覚えた一つの原因であろう。

(3) 『神霊界』や七巻本では「三ぜん世界一同に開く」という表記になっている。

(4) 天理教においても、日本と外国を区別する発想は存在した。中山みきの「おふでさき」にも「この先は唐と日本を分けるてな」(高山の日本の者と唐人と 分けるのは 火と水とを入れて分けるで」(第貳号)とある。『大本神論』の表現が天理教の観念をそのまま受け継いだとはいえないが、一定の影響を受けているのではないかと推測される。「筆先」の表現には、天理教と共通する観念、類似する観念が多い。これについてはあらためてまとめて整理したい。